

## 小学校家庭科における環境と食文化の教材研究

— 箸に関する授業の成果と課題 —

飯野 朋恵\* 石島 恵美子\*

(2016年10月28日受理)

Studies on Environment and Food Culture in Elementary School Home Economics

-The Effects and Problems of the Chopstick Education-

Tomoe IINO and Emiko ISHIJIMA

キーワード: 食文化, 箸, 体験学習, 小学校家庭科, 教材研究

「和食」が無形文化遺産に登録され、世界の中でも重要な文化として認識されている。その中でも、箸は和食の大切な道具である。しかし、子どもたちは簡便性を優先し、箸の文化性や食生活技能などの価値の認識は視野から外れがちである。さらに、食と一番かかわりの深い家庭科教育の小中高の現場においても、箸は調理道具として教科書にわずかに記載があるものの、箸の文化性や食生活技能については触れられていない。習得状況を見ると、箸の持ち方については、養育者による箸の持ち方の矯正行為が関与しており、小学校低学年でも正しく箸をもてる者は少ないと報告されている。昨今の家庭の教育力の低下を考えると学校教育で、箸の知識・技能について等しく学ぶ場を設けることが必要である。

本研究では、まず、小学生が正しい箸の知識・技能を習得するために、小学校家庭科において、箸に対する興味関心を向上させる「箸作り」を通した箸の使い方の授業を開発する。その教育効果を測定し、児童の学びを検討することを目的とし、「竹」を箸の資材にすることで、資源を利活用し、自分の生活と身近な環境とのかかわりに気付けるようにする。その結果、正しい箸の知識・技能の習得や和食に対する評価が向上するなど一定程度の結果が見られた。

### はじめに

「和食」が無形文化遺産に指定され、世界の中でも重要な文化として認識されている。日本人の伝統的な食文化が、無形文化遺産保護条約に基づき、世界各地の伝統芸能や社会的慣習などと共に保護されることになった。対象となる「和食」は、特定の食事や料理ではなく、「日本人の伝統的な食文化」である。<sup>1)</sup> その「和食」には4つの特徴があり、1つ目は「多様で新鮮な食材とその持ち味の尊重」である。2つ目は「栄養バランスに優れた健康的な食生活」、3つ目は「自然の美しさや

-----  
\*茨城大学教育学部

季節の移ろいの表現」, 4つ目は「正月などの年中行事との密接な関わり」である。無形文化遺産に登録された「和食」はあくまでも「日本人の伝統的な食文化」である。日本の食文化が自然を尊重する日本人の心を表現したもので、伝統的な食文化として世界を超えて受け継ぐ必要がある。その中でも、箸は和食の大切な道具である。しかし、子どもたちは簡便性を優先し、箸の文化性や食生活技能などの価値の認識は視野から外れがちである。<sup>1)</sup>さらに、食と一番かかわりの深い家庭科教育の小中高の現場においても、箸は調理道具として教科書にわずかに記載があるものの、箸の文化性や食生活技能については触れられていない。<sup>1)</sup>

習得状況を見ると、箸の持ち方については、養育者による箸の持ち方の矯正行為が関与<sup>2)</sup>しており、小学校低学年でも正しく箸をもてる者は少ない<sup>3)</sup>と報告されている。昨今の家庭の教育力の低下<sup>4)</sup>を考えると学校教育で、箸の知識・技能について等しく学ぶ場を設けることが必要である。

真下(2007)は大学生を対象に、小学生向けの箸作りの模擬授業を行い、授業を受けた大学生の教育効果を分析し一定の効果を得ている。しかし、実際に小学生に向けた実践授業には至っていない。

赤崎(2010)は子どもの箸の持ち方について、幼稚園児、小学生の保護者にアンケート調査をし、子どもの箸の持ち方の関心と指導頻度との関係を明らかにし、幼稚園児への箸の持ち方の指導の有効性を示した。筆者自ら、小学校での指導を課題としている。

そこで本研究では、まず、小学生が正しい箸の知識・技能を習得するために、小学校家庭科において、箸に対する興味関心を向上させる「箸作り」を通した箸の使い方の授業を開発する。その教育効果を測定し、児童の学びを検討することを目的とする。第二に、「竹」を箸の資材にすることで、資源を利活用し、自分の生活と身近な環境とのかかわりに気付けるようにする。

なお、本研究での箸の正しい持ち方は、一色(1999)の「箸の文化史」に依拠し、「上の箸を人差し指、中指で動かし親指はそえ、下の箸は薬指の先と親指の付け根において固定する持ち方」とする。また、箸の技能は、山内(2010)の「食育の観点から見た箸の持ち方と食事マナー」に依拠し、「握む、挟む、支える、運ぶという基本機能と、切る、裂く、ほぐす、剥がす、すくう、包む、載せる、押さえる、分けるという特殊機能」とする。

体験型授業にすることについての検討は、土田(2014)に依拠する、地域で行われる食育イベントで、家庭における緑茶文化の継承の実態調査と、食育推進活動の実践として、体験活動プログラムの効果を検証している。その結果、日本の緑茶文化の継承においては、「道具の名前や緑茶の入れ方を知り、実際に体験することでその楽しさを感じ、家でもやってみたいという意欲につながる」と示唆している。<sup>5)</sup>

次に、家庭科教育における環境教育については、倉盛(1994)の研究をあげることができる。家庭科における環境教育の指導案・指導法の検討を目的とし、炊飯の学習に環境問題(生活排水)を導入した授業実践である。家庭科で環境教育を行う意義は教科性から考えて、身近な環境に触れさせることで、子どもたちが日常生活を見直すきっかけを作ることができると示唆している。<sup>6)</sup>

箸の資材に竹材の利活用をする理由については、次のことが挙げられる。竹材の利用は古来より、たけのこ栽培や竹材生産のためだけでなく、農山村におけるさまざまな用途(農作業用の支柱、生活用品用資材、補助的な建築材など)に用いられてきた。利用頻度が高い時代には定期的な伐採が行われていたが、近年になって竹材の代替資材の普及やたけのこ輸入の増加のために、次第に竹林は放置されるようになり<sup>7)</sup>、生物多様性の低下を招いている。<sup>8)</sup>里山を保全していくために竹を定期

的に伐採していくことが必要である。竹を資源として利活用することは、環境の循環を生むことである。そこで本研究では竹材を用いて箸作りを行い環境の循環についての学習を取り入れることとする。

## 研究方法

### 1. 調査概要

平成27年10月13日(火)に茨城県N小学校5学年71名を対象に授業を行い、事前と事後にアンケートを実施した。授業は3,4時間目にAクラス(36人)、5,6時間目にBクラス(35人)、計2クラス(71名)で授業を行った。授業中に10分間で事前・事後のアンケートに答えてもらい、その場で回収した。得られたデータから、箸作りを通じた食文化の授業の有効性を分析する。事前アンケート調査では、現段階での箸の習得状況を調査するために、児童の箸の使い方に関する自己評価、箸の持ち方に関する自己評価、箸の使い方の習得時期、箸の使い方の指導者、箸の使い方を習得した場所の質問項目を設定した。加えて、日本食文化に対する意識調査をするために、箸の使い方を学校で教えてもらう必要性、和食を誇りに思うか、箸は大切な道具か、箸と環境の関係性についての質問項目を設定した。事後アンケート調査では、授業後の知識の定着を調査するために、授業を通して箸を正しく扱うことができたか、正しい箸の持ち方はどれかの質問項目を設定した。加えて、日本食文化に対する意識を調査する項目と授業の感想を設定した。

### 2. 授業実践の実施方法

#### (1) 授業実践を含む回の授業全体の流れ

(全2時間…本時1,2時間目)

時	○学習内容 ・学習活動	内容	学習活動における具体的評価規準	評価方法
1	○箸の文化性や機能性について理解する。 ・箸の紙芝居をきく ・箸作りを行う	D (3) ア	・箸の文化性や機能性について理解することができる。	発言
2	○お箸の正しい持ち方や使い方を実践する。 ・大豆運びゲームをする ・箸の紙芝居をきく	B (2) イ	・正しいお箸の持ち方や使い方をすることができる。	ワークシート

#### (2) 対象授業の内容

##### ・授業の目標

- お箸作りを通して、日本食文化におけるお箸の重要性について関心を持つことができる。(関心・意欲・態度)
- 使いやすい箸作りを行うことができる。(創意工夫)
- 正しいお箸の持ち方を理解し、使用することができる。(技能)
- 日本食文化におけるお箸の役割や箸と環境の関連性、正しい箸の使い方(マナー)がわかる。(知識・理解)

##### ・準備・資料

- 説明に使うもの  
紙芝居(たっちゃんとおはし物語) ワークシート
- 箸作りに使うもの(6人班1人分)

約 20 センチの長さの竹 2 本 80 番・240 番のやすり 1 枚 (縦 10 センチ, 横 6 センチ) ずつ  
 マスク オリーブオイル 軍手 (子ども用) 新聞紙  
 絵付け用ペン (水色, 黄色, 紫, ピンク, オレンジ)  
 ○大豆ゲームに使うもの (6 人班 1 人分)  
 大豆 直径 20 センチ紙皿 2 枚

・授業の展開

学習の活動・内容	時間	指導上の留意点 ◎評価
1. 事前アンケートに回答し, 自分の箸の持ち方を把握する  2. 本時の内容をつかむ お箸作りを通して お箸の大切さを感じよう	10 分	・児童が実際どのような箸の持ち方をしているか答えてもらい, 自分の持ち方を把握し, 学習意欲を高めていく。
3. 紙芝居を聞く (前半) ・無形文化遺産について→世界の食事法→箸の地域の違い (日本の箸の材料はなぜ竹や木なのかについても含む)  ・竹の箸を見せ, どうやって箸ができるのかを写真で理解する	10 分	・みんなに語りかける口調で話す。 ・児童への問いかけを紙芝居に入れ, 学習意欲を高める。  ・竹が順々に細く切っていく写真を見せ, お箸ができるまでの過程を見せ, お箸に対して興味をもつよう促す。
4. お箸作りをする ①竹の棒をやすりで削っていく。 ②形が整ったら, ペンで飾り付け。	30 分	・お箸を作っている間, 机間巡視し, 児童の道具の使い方を確認しながら学習を支援する。
5. 紙芝居を聞く (後半) 箸の機能→箸の持ち方	10 分	・お箸の使い方を紙芝居の内容に取り入れ, 実際にお箸の使い方を学ぶことで, お箸の正しい持ち方を学ぶことができるようにする。
6. 大豆運びゲームをする。 ・グループ内で何個豆を運べるか競争する。	15 分	・実際に正しくお箸を使うことができているか, 観察し, 間違っている子がいれば正しく持てるよう支援する。
7. 「お箸の達人カード」に挑戦する。 ・はさむ, 握む, …	5 分	◎正しく箸を使用することができる (活動・ワークシート)  ・家庭でも箸を正しく使えるように「お箸の達人カード」の使い方について説明する。
8. 本時のまとめ  箸は私たち日本食文化にとって重要な道具である。	10 分	
9. 事後アンケート		

## ～おはしの達人～

一、和食とは…（無形文化遺産）に登録されている。おはしを使い食事をする。 名前 \_\_\_\_\_

二、日本のおはし…おもに、（木）や（竹）からできている。たくさん機能がある。

三、おはしの持ち方

上のおはしは（親指）と（人さし指）と（中指）の三本で軽く持つ！

下のおはしは親指と人さし指の間にはさみ、（薬指）のつめの横にあてる！

四、おはしの使い方

スタート

～おうちの方へ～  
竹のお箸を使う際は、箸にオリーブオイルを薄く塗ることで、色の着色や劣化を抑えることができます。  
ぜひ、世界でたった一つの竹箸を末長く使っていただけることを願います。

図1 ワークシート

### 結果および考察

#### 1. 事前アンケート調査の結果

##### (1) 箸の習得状況

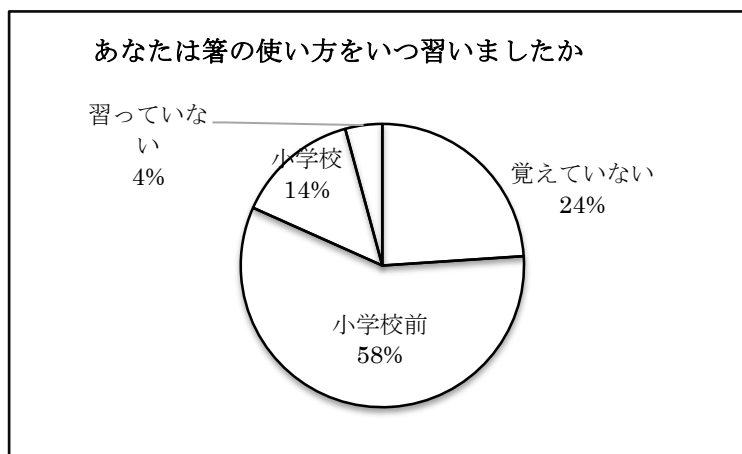


図3 箸の使い方の習得時期

「箸の持ち方をいつ習ったか」の問いに「覚えていない」と回答した人は 17 人 (24%)、「小学校前に習った」と回答した人は 41 人 (58%)、「小学校に入ってから習った」と回答した人は 10 人 (14%)、「習っていない」と回答した人は 3 人 (4%) であり、約 6 割が小学校就学以前にお箸の使い方を習っていることになる。

「箸の持ち方を誰に教わったのか」という問いに「覚えていない」と回答した人は 12 人(17%)、「親に習った」と回答した人は 45 人(63%)、「祖父母に習った」と回答した人は3人(4%)、「友人に習った」と回答した人は0人(0%)、「幼稚園・保育所の先生に習った」と回答した人は2人(3%)、「小学校の先生に習った」と回答した人は5人(7%)、「習っていない」と回答した人は4人(6%)と回答しており、親に習っている人が多くいる。

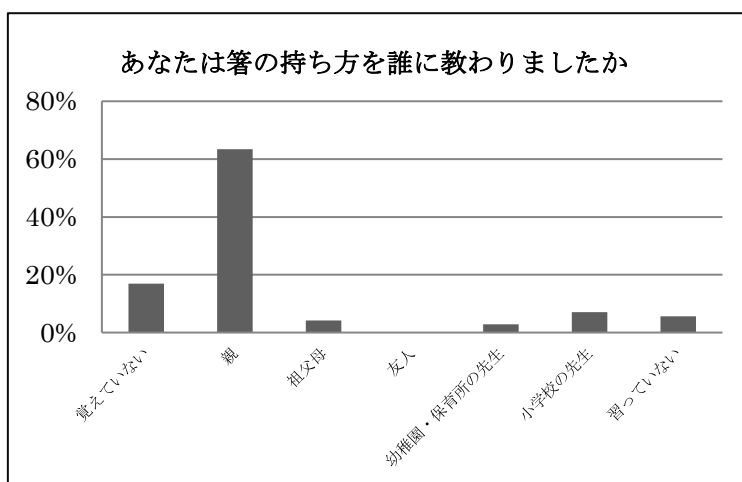


図4 箸の使い方の指導者

「お箸の使い方を習った場所」という質問に「覚えていない」と回答した人は 14 人(20%)、「家族での食卓」と回答した人は 47 人(66%)、「周りの人の見よう見まね」と回答した人は3人(4%)、「テレビ」と回答した人は0人(0%)、「学校」と回答した人は5人(7%)であった。

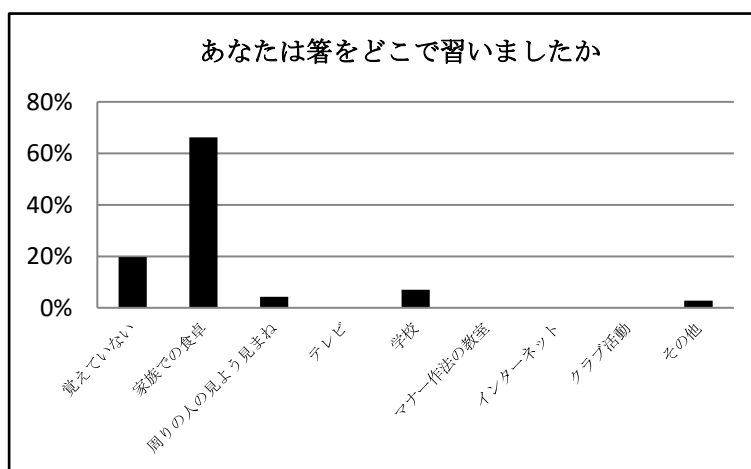


図5 箸の使い方を習得した場所

## (2) 事前アンケートの箸の学習とその関連要因

「箸の学習の有無」に対してそれぞれ、「箸を誇りに思うか」、「日本人にとって大切な道具」、「箸を上手く使いたい」か、3項目で、回答を「とても思う」、「ややそう思う」、「ややそう思わない」、「そう思わない」の4段落で求め、それぞれ「とても思う」を4点、「ややそう思う」を3点、「ややそう思わない」を2点、「そう思わない」を1点とし得点化して、対応あるサンプルの  $t$  検定を行った。授業の事前と事後のアンケートの平均点を比較する。その結果、「箸を誇りに思うか」、「日本人にとって大切な道具」、「箸を上手く使いたい」全て、有意な差が見られた。

表1 箸の学習経験と箸に対する意識の関連要因

	習っていない (n=20)		習っている (n=51)		P値	t 検定
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
箸を誇りに思うか	3.25	0.72	3.65	0.69	0.01	**
日本人にとって大切な道具	3.40	0.75	3.80	0.53	5.96	**
箸を上手く使いたい	3.15	1.18	3.78	0.54	19.31	***

\*:  $p < 0.1$ , \*\*:  $p < 0.05$ , \*\*\*:  $p < 0.01$

## 2. 事前・事後アンケートの比較

## (1) 箸の使用状況

事前アンケートでは、お箸を正しく使うことが「できる」と回答した人は37人(53%)、「できない」と回答した人は14人(20%)、「分からない」と回答した人は19人(27%)と、約5割が「できない」「分からない」と回答している。しかし、授業後の事後アンケートでは、お箸を正しく使うことが「できる」と回答した人は59人(88%)と35%増加している。

事前では、お箸の持ち方が「一本化」(日本の箸をすくうようにしてもつ)している人は4人(6%)、「人差し指」(本来は親指、人差し指、中指で押さえる)で押さえている持ち方の人は18人(25%)、「交差」している持ち方の人は4人(6%)、「握る」持ち方の人は0人(0%)、その他「中指と人差し指で押さえている」持ち方の人は1人(1%)と、間違った箸の持ち方は27人(38%)、「正しい」持ち方の人は44人(62%)と、約6割は正しくもてているが約4割は箸の使い方が間違っていた。しかし事後では、「一本化」と回答した人は1人(1%)、「人差し指一本で押さえる」と回答した人は9人(13%)、「交差する」と回答した人は0人(0%)、「握る」と回答した人は0人(0%)、「正しい」持ち方を回答した人は61人(86%)、「その他」と回答した人は0人(0%)であり、約9割の人が正しい持ち方を回答することができた。

図5 事前の箸の使い方に関する自己評価

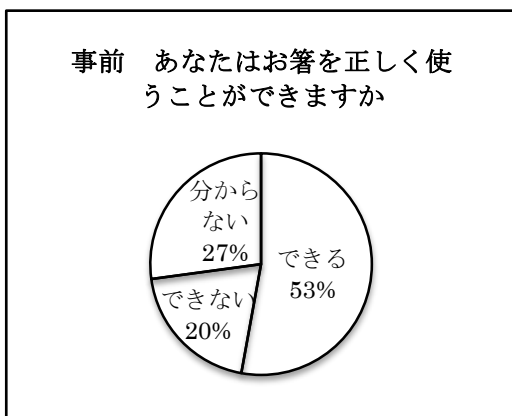


図6 事後の箸の使い方に関する自己評価

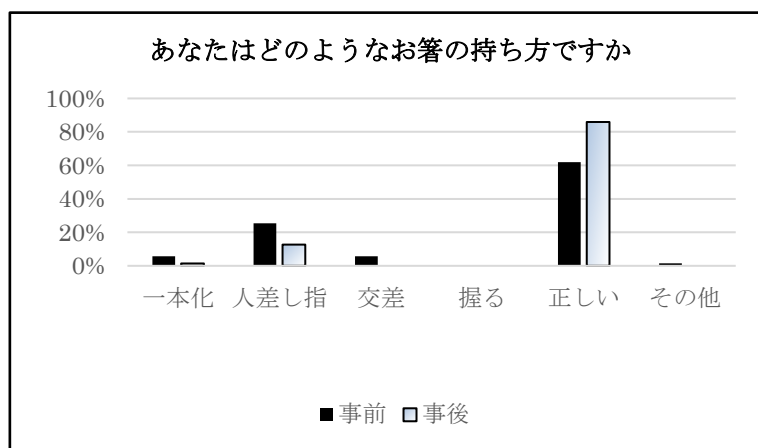
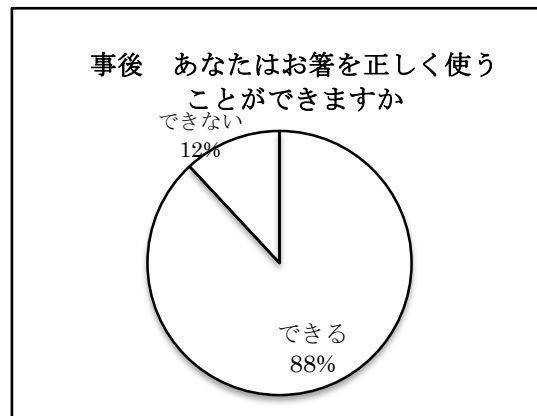


図7 箸の持ち方に関する自己評価

## (2) 事前事後アンケートの意識変化

「箸の使い方を学校で教えてもらいたいですか」、「和食を誇りに思いますか」、「箸は日本にとって大切な道具ですか」、「箸は環境と何か関係があると思いますか」、「箸を上手に使いたいか」の5項目で、回答を「とても思う」、「ややそう思う」、「ややそう思わない」、「そう思わない」の4段落で求め、それぞれ「とても思う」を4点、「ややそう思う」を3点、「ややそう思わない」を2点、「そう思わない」を1点とし得点化して、対応あるサンプルの  $t$  検定を行った。授業の事前と事後のアンケートの平均点を比較する。

その結果、「箸の使い方を学校で教えてもらいたいですか」、「和食を誇りに思いますか」、「箸は日本にとって大切な道具ですか」、「箸は環境と何か関係があると思いますか」は有意な差が見られた。

$t$  検定の結果から、「箸の使い方を学校で教えてもらいたいか」という質問で、有意な差がみられた背景として、児童が学校の授業の中で、普段使っている箸の使い方について改めて学習することによって、皆が等しく学ぶことができる学校教育の現場で習う意義を感じたからだと考える。「和食を誇りに思いますか」という質問で有意な差がみられた背景には、授業内において、和食が無形文化遺産に指定されたことについて触れたり、日本の食文化について学習することができたためだと考える。



「箸は日本にとって大切な道具ですか」という質問で有意な差がみられた背景には、授業の中で箸の機能性について触れることで、和食を箸で食べる意味を理解したためだと考える。「箸は環境と何か関わりがあると思いますか」という質問で有意な差がみられた背景として、竹材を用いて箸作りを行い、環境の循環についての学習を行ったためだと考える。「箸を上手に使いたいですか」という質問では有意な差は見られなかった。これは、元々箸を上手に使いたいと思っている児童が多いことが考えられる。

\*: $p<0.1$ , \*\*: $p<0.05$ , \*\*\*: $p<0.01$

表2 事前事後アンケートの意識変化

項目	事前		事後		P値	t検定
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
箸の使い方を学校で教えてもらいたいですか	2.75	1.11	3.37	0.69	0	***
和食を誇りに思いますか	3.35	0.51	3.86	0.13	0	***
箸は日本にとって大切な道具ですか	3.69	0.39	3.89	0.13	0.02	**
箸は環境と何か関わりがあると思いますか	3.03	1.11	3.83	0.23	0	***
箸を上手に使いたいですか	3.61	0.67	3.66	0.66	0.68	<i>n. s</i>

### (3) 授業後の自由記述欄分析

表3 授業の感想の分析 n=71人 (複数回答含む)

項目	代表的なコメント	度数
箸の使い方について	・箸の正しい使い方が分かった	42
	・大豆運び大会が楽しかった	(59%)
箸づくりについて	・箸づくりが楽しかった	18
	・鑊で竹を削るのが難しかった	(25%)
食文化について	・箸は日本にとって重要な道具であることがわかった	47
	・和食・無形遺産を学べてよかった	(66%)
環境について	・竹を利活用することは環境によいことが分かった	2
		(3%)

授業の感想を自由に記述することを求め、子どもたちに聞き、記述の分析を行ったところ、「箸作りが楽しかった」、「大豆運び大会が面白かった」という感想が多く、子どもは体験的な活動が特に印象に残ったようである。同時に「箸の使い方が分かった」「箸は日本にとって大切な道具である」との記述も多くみうけられ、授業の内容を理解したと言える。このことから、子どもたちは体験的な活動を楽しみながらもしっかりと学習できていることが分かる。つまり、この授業の目標でもあった、体験的な活動を取り入れながら日本の食文化を学ぶことができた。しかしなが

ら「環境」の単語の頻出回数が少ないことから、環境面について子どもたちの記憶に残らなかったようだ。さらに少数意見であったが、「箸作りの持ち方が難しかった」、「箸作りが難しかった」とあるように、子どもによっては難しい作業であったようだ。

## まとめ

本研究では、小学生を対象に「箸づくりを通した日本の食文化の授業」を行い、その教育効果を測ることを目的とし、以下のことが明らかとなった。

- 1) 「箸を正しく使うことができるか」について、授業をやる前と後では箸を正しく使うことができる人が増え授業効果が高いことが示された。
- 2) 「箸の使い方を学校で教えてもらいたいか」について、児童が学校の授業の中で、普段使っている箸の使い方について改めて学習することによって、皆が等しく学ぶことができる学校教育の現場で習う意義と必要性についての意義が上昇した。
- 3) 「和食を誇りに思いますか」について、授業内において和食が無形文化遺産に指定されたことについて触れたり、日本の食文化について紙芝居や体験学習を工夫したため、和食に対する意識が上昇した。
- 4) 「箸は日本にとって大切な道具ですか」について、授業の中で箸の機能性について触れることで、児童が和食を箸で食べる意味を理解したため、箸は大切な日本の道具であるという意識が上昇した。
- 5) 「箸は環境と何か関わりがあると思いますか」について、箸の歴史についてと竹を利活用する意義について授業内で触れたため、児童は箸と環境は関わりがあることを認識が変容した。

## 引用・参考文献

- 1) 真下弘征(2006), 『箸作りを通して食文化を知る授業』の創造, 『宇都宮大学教育学部紀要』, 第29号, pp.477-486
- 2) 山内知子(2010), 「食育の観点からみた箸の持ち方と食事マナー」, 『日本調理科学会誌』, 第43号, pp.260-264
- 3) 赤崎真弓(2010), 「幼児期から学童期における子どもの食生活に関する実態把握」, 『長崎大学教育実践総合センター紀要』, 第9号, pp.129-138
- 4) 古市久子(2004), 「家庭の教育力の低下と親の意識の変移について」, 『エデュケア』, 第25号, pp.15-30
- 5) 土田裕美(2014), 「地域の食育イベントに参加した子どもたちに見る家庭における緑茶文化の継承の実態と体験活動プログラムの効果の検証」, 『日本食育学会誌』, 第8号, pp.291-299
- 6) 倉盛三知代(1994), 「環境教育を導入した家庭科の指導-生活排水と米の教材-」, 『和歌山大学教育

学部教育実践研究指導センター紀要』, 第 3 号, pp.85-96

7)鳥居厚志(2003),「周辺二次林に侵入拡大する存在としての竹林」,『日本緑化工学誌』, 第 28 号, pp.412-416

8)瀬嵐哲央(1989),「竹林群落の構造と遷移の特性」,『金沢大学教育学部紀要自然科学編』, 第 38 号 pp.25-40

9)松本宏美(2014),「地域社会における『共創共食』型食育の実践的研究」, 第 16 号,『同志社大学政策学会』 pp.119